

旅情の文学碑

長谷川 敬

(略歴)

長谷川 敬 (はせがわ けい)

一九三一年大阪に生れる。

大阪、北朝鮮(平壤・羅南)、広島、岐阜、山梨、名古屋、東京などに住む。
この間、小学校から大学まで十校を経る。

日本大学芸術学部映画学科中退。養護施設指導員、放送劇団員、放送作家、
CMソング作詞家、コピーライター、プランナーなどの職につく。

中日詩人努力賞。文学界新人賞(芥川賞候補)その他。

主著に詩集「花を噛む孤児」「棲り木と巣と」「花泥棒のような」

小説「青の儀式」(湯川書房)「沖を見る犬」(集英社)

「東京物語 昭和史百一景」(時事通信社) その他。

日本現代詩人会会員。日本文学風土学会会員。

旅情の文学碑

定価 二、二〇〇円

印刷 一九九一年十一月二十五日

発行 一九九一年十二月十日

著者 長谷川敬

編集人 長峰八州男

発行人 戸田栄輔

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋一―一

大阪市北区堂島一―六

北九州市小倉北区紺屋町一三一―一

名古屋市中村区名駅四―七

印刷 株式会社 三幸社

旅情の文学碑

文学碑撮影の旅では、作品が発する声を聴きながら、さらには作家や詩人たちの生きざまを見据えてカメラを構える。沈黙の石は、戦慄の響きを閉じ込めて時間を停止させる。また、簡潔で濃密な言葉が性的挑発に誘ってくる。

過去二十年にわたり、これら作品と風景に対峙してきた。保存会を設置して碑を大切に
する地域、顧みることもなく荒れるままに放置されたものもあり、それら地域の人々の心を覗き見ることもできた。

人間よりも風景に興味があることは、作家として失格であるかも知れないと述べたのは三島由紀夫だが、私もまた同じ思いの人間であり、風景のなかに作者の想いを暗示させることが、私の小説作法でもある。何故ならば、人間は自然のなかで生かされているという考えが強いからだ。

撮影に際して、可能な限り周辺風景を構図に取り込むのも、このような姿勢ゆえであり、また、風土と作品の関係を示すためでもある。しかし、建立地の悪条件で不可能な場合も多かった。

私の取材撮影は、光線などの好条件を待ってのものではない。一基の碑を撮影するため
に時間をかけていられない旅であるからだ。全国にどれほどの碑があるか見当もつかないが、これまでに約三百点撮影したなかから、今回は地域を考慮しての掲載である。

写真の引き伸ばし作業は素人だけに苦しくもあり、また印画紙に現れる像を見据えると
きの嬉しさも味わった。執筆にあたり多くの著書を参考に行っているが、ここで示すにはあまりにも数多いために割愛させていただいた。

出版にあたり、毎日新聞社出版局美術出版部の皆様にお世話になったが、とくに助村竹
二郎氏の熱意によるものが多大であり感謝したい。

なお、文中の作品で現代仮名遣いになっているものもあることをお断りしておく。また、
各項目の題名は、作品の一節や地名から私が選びつけたものもある。

一九九一年十月

長谷川 敬

目次

■交通案内

久保栄	根室本線・帯広駅前より「筒井温泉ホテル」行きに乗車。十勝川国際ホテル筒井裏	6
中城ふみ子	帯広市内。帯広神社境内裏手、帯広川畔。	8
吉屋信子	根室本線池田駅下車。清見ヶ丘公園。	10
鳴海要吉	下北交通田名部駅下車。むつバスターミナルから尻屋崎行き終点。	12
石川啄木	東北本線泷沢駅下車。タクシイ利用。	14
立原道造	盛岡市内、愛宕山展望台下。	16
辻潤	大船渡線気仙沼駅下車、気仙沼市本町 観音寺。	18
宮沢賢治	東北新幹線一ノ関駅下車。バス中尊寺行き。	20
斎藤茂吉	奥羽本線上山駅下車。山形方面行きバスで蔵王ゴルフ場前下車。	22
丸山薫	山形駅下車。鶴岡行きバスで間沢開発センター前下車。タクシイで岩根沢へ。	24
土井晩翠	仙台駅下車。バスで青葉城跡へ。	26
高村光太郎	東北本線二本松駅下車。霞ヶ城跡。	28
川端康成	上越新幹線で越後湯沢駅下車。	30
野口雨情	常磐線磯原駅下車、北へ線路沿いに徒歩約20分。	32
中山義秀	総武本線成田駅下車。成田山境内。	34
大手拓次	信越本線磯部駅下車。磯部温泉。	36
若山牧水	東京池袋から西武鉄道・特急で終点の西武秩父駅下車。	38
森鷗外	東京都台東区池の端、水月ホテル内。	40
太宰治	中央本線大月駅乗替え、富士急行で終点・河口湖下車。	42
吉田一穂	上越線渋川駅から吾妻線で長野原駅下車。バスで草津温泉経由・白根火山へ、殺生河原下車。	44
今井邦子	中央本線下諏訪駅下車。徒歩約15分。	46
山本周五郎	中央本線韭崎駅下車。徒歩で約15分、観音山公園。	48

中勘助	50
新美南吉	52
野口米次郎	54
森田草平	56
久保田万太郎	58
室生犀星	60
泉鏡花	62
井上靖	64
三好達治	66
折口信夫	68
吉井勇	70
夏目漱石	72
梶井基次郎	74
織田作之助	76
宇野浩二	78
会津八一	80
橋本多佳子	82
有本芳水	84
竹久夢二	86
薄田泣菫	88
木山捷平	90
志賀直哉	92
有島武郎	94
生田春月	96
小泉八雲	98
与謝野晶子	100
阿部知二	102
林芙美子	104
原民喜	106
鈴木三重吉	108
中原中也	110
火野葦平	112
檀一雄	114
北原白秋	116
佐藤惣之助	118
静岡駅下車、静岡鉄道バス5番から薬科線で羽鳥下車。	50
名古屋鉄道河和線知多半田駅下車。雁宿公園。	52
名古屋駅から名鉄津島線で津島下車。天王川公園。	54
岐阜駅下車。名鉄新岐阜駅前からバスで鷺山方面行きバス。	56
名古屋から近鉄または関西線で桑名駅下車。徒歩約20分。	58
北陸本線金沢駅下車。犀川畔。	60
北陸本線金沢駅下車。卯辰山中腹。	62
金沢下車。北陸鉄道金沢駅から、終点・内灘駅下車、内灘総合公園。	64
北陸本線芦原温泉駅下車。バスで東尋坊下車。	66
金沢駅から七尾線で羽咋駅下車。バスで気多大社。	68
京都駅からバスで四条京阪前下車。徒歩約5分。	70
京都駅からバス河原町経由で御池通りへ。	72
大阪梅田から地下鉄・本町駅下車。親公園。	74
大阪梅田から地下鉄・四天王寺前駅下車。口縄坂。	76
大阪梅田から地下鉄・谷町四丁目駅下車。中大江公園。	78
京都から近鉄線で大和西大寺下車。バスで法華寺前下車。	80
京都から近鉄線で大和西大寺下車。徒歩3分で西大寺。	82
山陽線岡山駅下車。市電又はバスで後楽園へ。	84
山陽新幹線岡山駅下車。後楽園入口前、旭川畔。	86
山陽本線倉敷下車。タクシイ利用。厄神社境内。	88
山陽線笠岡駅下車。タクシイ利用、笠岡市山口。	90
山陰線城崎駅下車。城崎温泉。	92
山陰線鳥取駅下車。砂丘行きバスで砂丘パレス前の停留所下車。	94
山陰線米子駅下車。バスで皆生温泉へ。皆生公園。	96
山陰線松江駅下車。市内千鳥町松江温泉近くの穴道湖畔。	98
山陰線香住駅下車。バス村岡行きなどで約3分。	100
山陰本線出雲市駅下車。バスにて出雲大社へ。	102
山陽本線尾道下車。市営バスで長江口下車。ロープウェイで3分。	104
広島駅から、市電で原爆ドーム前下車。	106
広島駅から、市電で原爆ドーム前下車。	108
山陽新幹線小郡駅から山口線で湯田温泉駅下車。	110
小倉駅前からバスで若松区へ。又は、JR筑豊本線・若松駅下車。	112
福岡駅から地下鉄1号線で姪浜駅下車。市営フェリーで能古島へ。	114
福岡から西鉄大牟田線で西鉄柳川下車。川下り舟利用が最適。	116
那覇バスターミナルから首里へ、守礼門から徒歩約5分。	118

久保栄 『火山灰地』

北海道・十勝平野は、北は大雪、西は日高山脈、東は白糠丘陵という三方が山で囲まれた大平原である。扇状地や段丘によって構成された台地の中央部に十勝川が流れ、耕地防風林が整然と植えられた畑作地帯は、茫洋たる海を思わせる。

この平原の中央に位置する帯広市は、アイヌ語のオ・ペレペレケ・ブ（帯広川）から採られたといわれる。

帯広に、劇作家・久保栄が取材のために訪れたのが、市制施行後三年目の昭和十一年九月。札幌生まれの彼は、大学卒業後築地小劇場文芸部に入る。土方与志が私財を投じて、現在の東京都中央区築地二丁目に建てたものだ。

『戯曲は、凍土という仮題をつけていたが、火山灰地という農業術語を用いたく思っている』

と、帯広から結婚相手に書き送った。

火山噴出によって累積した新旧の火山灰地で成る原野の開拓は、依田勉三らの晩成社によるもので、開拓のほかに乳製品の事業化も試みた。晩成社の入植は失敗するが、痩せた土地でも収穫があるということで、豆作に活

路を見いだす農民であった。

『日本の北の涯での農業都市／どこよりも雪融けが遅く／どこよりも霜の早く来る平原のなかに（略）ひと粒の穀物のように小さな市／だが市をめぐる二十万町歩の耕地から』

このような冒頭の語りで始まる『火山灰地・第一部』は昭和十三年六月、築地小劇場で幕を開けた。滝沢修、原泉、宇野重吉等の出演、久保栄が自ら演出した。

植物性モール温泉で知られる十勝川温泉に泊まった翌朝、熱気球で大平原を眼下にしたのち、国道二四一号線を車で向かい久保栄碑に着く。国際ホテル筒井の左手、坂道をのぼった右手である。

戯曲ゆかりの地、十勝管内音更町オサルシ沢。日高石に埋め込まれた御影石には次のように彫りこまれている。

『山からおろした切り木の束に つくる喜びと生きる呪ひをこめて 今日も明日も焼く炭焼窯』

えぞ桜が植えられている。碑の背後に観音像と鳥居があり、これらを避けて撮影する。

私たちはさらに北上し、暖冬のため紅葉前の原生林に囲まれた然別湖に着いた。



原生林に囲まれた然別湖。幾つもの入江を抱く複雑な湖岸風景が神秘的な世界を見せる。サケ科のオシロコマ生息地として知られる。



久保栄 北海道音更町オサルシ沢

「山からおろした切り木の束に つくる喜びと生きる呪ひをこめて 今日明日も焼く炭焼窯」

中城ふみ子『乳房喪失』

帯広神社祭の夜店は、戦前を思わせるレトロ調であった。色褪せた暖簾のせいであるのか、それとも漆黒の天のせいなのか、並ぶ店々から哀愁が漂ってくる。そのなかで、植木の叩き売りが珍しい。巧みな口上を聞きたくて人々が群れ集まる。通常の値段よりは少々高いようだが、口上代と思えば我慢できようというものだ。

帯広に生まれた中城ふみ子も、この夜店をひやかし歩いたことがあるのだろうか。

帯広高等女学校を卒業後、東京家政学院に進学した彼女は短歌に接し、卒業後故郷に戻り二十歳のとき国鉄技師と結婚、室蘭、函館などを移り住んだ。しかし、いつしか夫婦の間に溝ができ、短歌に活路を求める。やがて別居から離婚、乳癌のため左乳房を失ったのが昭和二十七年のことだった。癌は転移し、二十九年には札幌医大病院に入院、そのなかで『短歌研究』の五十首詠に応募し入選。『短歌研究』は、中井英夫が編集にたずさわっていた時代に、寺山修司、中城ふみ子ら新人発掘に貢献した短歌誌である。

歌集『乳房喪失』は、川端康成の序文を得て昭和二十九年出版の運びとなった。

しかし、処女歌集発行の喜びもつかのまのことで、一カ月後に息を引き取る。三十一歳の若さであった。

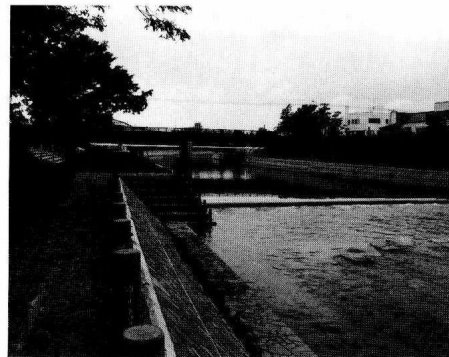
祭礼のために着飾った家族らが詣でにくる帯広神社。社殿正面左、境内裏手に中城ふみ子歌碑がある。

『冬の皺寄せある海よ今少し生きて己れの無惨を見むか』

晩秋の雲を映し流れる帯広川畔、歌碑は悲痛な声を沈めて建つ。

歌人としてようやく認められたばかりの彼女だったが、その痛ましき故にか、昭和三十年、彼女をモデルにした小説『乳房よ永遠なれ』を若月彰が書き、それらをもとにした同名の映画が日活作品として、同年に封切られた。田中絹代監督、月丘夢路、葉山良二、森雅之、左卜全、飯田蝶子らの出演である。また、渡辺淳一も『冬の花火』で、彼女をモデルにしている。

空港へ向かう途中、かつての国鉄「幸福」駅に足を止める。駅前の観光客相手の売店だけが健在で、錆びついた鉄路の行方、厳しい季節を目前にする十勝平野の茫々たる大平原に視線を投げつづけた。



帯広市内を流れる帯広川。市内には十勝川温泉と同様に、モール温泉の洒落たホテルもある。十勝川のサケ（アキアジ）は美味だ。



中城ふみ子 北海道帯広市帯広神社

「冬の皴寄せゐる海よ今少し生きて己れの無惨を見むか」

吉屋信子『地の果まで』

北海道根室本線池田駅から、定期バスがワイン城を経由して走る。ワイン城とは少々大仰な名称だが、池田町の観光名所である。

町おこしという運動といち早く取り組み、ワインを取り入れたのだった。町営レストランが三階にあり、十勝ワインを味わう人々で賑わう。

十勝川と利別川の合流する地に明治三十七年、駅が開設された。かつての国鉄池北線は、現在、北海道ちほく高原鉄道・ふるさと銀河線として名称を変えている。

ふるさと銀河線、夜汽車に乗れば銀河が天を飾り流れるのだろうか。この路線に乘車したことはないが、北見は忘れられない地名である。高校時代の親しい友人がエリート官僚として赴任し、病のために若くして亡くなったからだ。

当時、川合村と称した池田町に吉屋信子が兄の招きで訪れ、社宅に落ち着き小説を書き始めたのは、大正八年のことである。兄は日本皮革会社池田工場長として赴任していた。その兄は文学志望の信子の理解者であった。大阪朝日新聞がその頃、懸賞小説を募集しており、信子は応募するために兄の家で執筆を

はじめる。

アカシアの花が匂う五月から七月までかかり、四百枚を仕上げるが、疲れると、近くの清見ヶ丘を散歩したり、牧場を見学したり、テニスで遊んだという。

作品は当選し、作家としてデビューする。二十三歳のときだ。

『石狩と十勝の国境をつらぬいて、汽車の線路は、幾重にも大きい曲線を地に描いて、荒涼たる平野へと走る。嗚呼、荒涼！雄大！冬の平野よ！緑は月の光に照らされた雪の積った平原を見渡して、胸に熱い涙を覚えた』

清見ヶ丘公園の西入り口に、当選作『地の果まで』の一節が黒御影石に刻まれて建つ。

公園はカシワの原生林と桜の名所だとのことだが、ワイン城から徒歩で二十分程度、隣接してグラウンドがあり中学校がある。

数人の中学生がボール遊びに興じているのを眺めながら、公園内を散策する余裕もないままに去った。

木原直彦氏の著書『北海道文学散歩』によれば、長編小説を書き送って間もなく、父の危篤を知り、兄と信子は宇都宮に駆けつけるが昏睡状態であったという。



帯広市緑ヶ丘公園。各種の文化施設があり、帯広百年記念館では十勝の自然と開拓の歴史が展望される。



吉屋信子 北海道池田町清見ヶ丘公園

「石狩と十勝の国境を貫いて、汽車の線路は、幾重にも大きい曲線を地に描いて、荒涼たる平野へと走る……」

鳴海要吉『諦めの旅』

下北半島の北東端、太平洋と津軽海峡の合する尻屋崎まで、むつ市田名部からバスで約一時間の距離であった。前夜の田名部祭では、五台の山車が午前零時になると町内の十字路に向かい、「ヤマヤレ」の太鼓の高鳴りを合図に南へ北へ別れるさまはもの悲しい夏のフィナーレだった。

かつては尻谷、志利屋とも記され、アイヌ語では絶壁の岬の意だという尻屋崎。海食台地には野放しの牛馬が草を食んでいる。「ヤマセと呼ぶのです」

案内する友人が教えてくれる激しい風が軀を吹き飛ばす。海潮の声を聴く牛馬の眼は、深く鋭く美しい。寒風や吹雪に耐えるために短脚で胴の太い寒立馬が生まれたのだ。

明治九年に竣工された灯台を背景にして、鳴海要吉碑が建つ。

『諦めの旅ではあった 磯の先の 白い灯台に 日が映していた』

碑陰には次のように刻されている。

『鳴海要吉先生は黒石の人、若くして文学に志し、島崎藤村、田山花袋に師事した。先生が東通村尋常小学校に赴任されたのは、明治四十年十月のことである。教鞭をとるかたわ

ら、作歌活動に勤しまれた先生は、尻屋崎、猿ヶ森砂丘、左京沼など、私達の故郷の自然を広く発表された。いまその代表作を刻み、先生を忍ぶよすがとした』

ローマ字詩によって大正時代に活躍した鳴海要吉の碑は、同じく下北半島の佐井村・願掛岩なる巨大な岩の下にもある。

『あそこにもみちはあるのだ 頭垂れ ひとりゆく 猿がなく浜』

出身地を同じくする秋田雨雀の筆によるもので、ローマ字でも刻まれている。今東光は従兄弟である彼の人柄を愛していたという。今東光には、亡くなる一年前の誕生日に自宅を訪問した私だが、鳴海要吉について知らなかったため訊ねることもできなかった。

この願掛岩の碑を訪ねたとき、折からの激しい風雨のなかであった。奇岩が並び屹立する仏ヶ浦まで観光船で往復したのちであるが、刻まれた歌の血を吐くような寂しさがひた寄せてくるのだった。

尻屋崎を訪れた夜、薬研温泉の古畑旅館に泊まった。主人の祖先は豊臣の落武者で、姓を変えてこの地に住みつき、薬研に湧く温泉の「湯守り役」をつづけてきたと語った。



田名部と大湊の合併で誕生した本州最北の市、むつ市は下北半島の中心的存在である。恐山、薬研温泉、仏ヶ浦への観光の拠点だ。



鳴海要吉 青森県下北半島尻屋崎

「諦めの旅ではあった 磯の先の 白い灯台に 日が映していた」

石川啄木『北上川』

石川啄木の故郷、岩手県玉山村渋民へは、二度の旅をした。東北新幹線開通の以前と以後である。

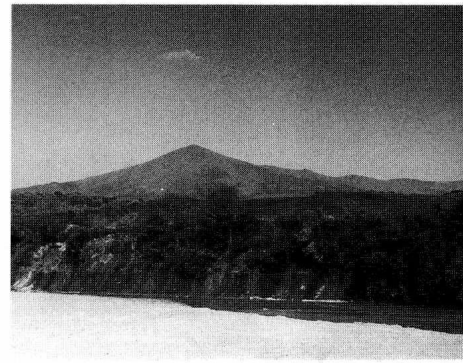
最初の旅では盛岡駅で荷物をコイン・ロッカーに預ける際、駅前の街頭広告放送から耳なれたCM音楽が流れてきた。なんだろう、と思う間もなく十年も前に私が作詞したものであったことに気付き、苦笑せずにいられなかった。妙な出迎えにあったものだ。

盛岡から鈍行列車で二十分、渋民に到着する。駅前にタクシイもなく、国道四号線をひたすらに歩いた。途中、啄木一家が寄寓した斎藤家跡を通る。

ダンブカーが激しい地響きをたてて走るために、落ち着いて周辺を眺める余裕もない。

啄木記念館のある万年山の麓まではかなりの距離があった。傍らに、かぶと造り茅葺き屋根の斎藤家が移築されており、さらに校舎も見受ける。明治三十九年、啄木が二十一歳のとき代用教員として勤務した渋民尋常小学校である。月給八円であった。

南部富士と呼ばれる岩手山、鈴蘭で名高い姫神山を左右に眺め、記念館をあとに渋民小学校脇の公園に建つ歌碑に向かう。



標高1124メートルの姫神山はスズランの名所である。中腹は高原地帯になっており、ハイキングやキャンプ地として人気がある。

『やはらかに柳あおめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに』

数多い文学碑のなかでも、とくに知られるものだ。数歩進むと、北上川に架かる吊橋の鶴飼橋が見える。

詩集『あこがれ』に収められている「鶴飼橋に立ちて」には次のように注がある。

『橋はわがふる里渋民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眺望を以て郷人賞し描かず。春暁夏暮いつをいつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪うてのかへるさなど、幾度かここに低回微吟の興を擅にしけむ』

しばらく佇んだのち、往復とも同じ道を歩くのもつまらないため、東北本線を渡り大きく迂回した。途中、不安になり子供に渋民駅を訊ねると、不思議そうな眼をむけて教えてくれた。渋民駅に戻ってから気付いたのだ。往復十キロはあったに違いない。

盛岡では、啄木新婚時代の家から、岩手公園の歌碑などを訪ねた。

『不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸われし／十五の心』



石川啄木 岩手県玉山村浪民

「やはらかに柳あおめる 北上の岸边目に見ゆ 泣けとごとくに」